

千葉市の
民話・伝説・
歴史

安藤

操

編著

民話・伝説・祭り・年中行事・町名の
由来・民謡……庶民生活とその年輪
を、あますところなくとらえた本書
は、躍進をつづける千葉市の心の
るさとであり、生きた郷土史である

著者紹介

安藤 操 一九三六年生れ

十校国語科教諭 房総民俗学会理事

著書に、『房総むかしむかし絵本』全

(はるぶ出版)、『千葉のむかし話・伝

三巻(日本標準)、『文学教育』(新評

言)などがある。

現住所 千葉市椿森三一六―三

協力

安藤一郎 一九三〇年生れ

中学校社会科教諭

千葉県郷土史研究会委員

論文『千葉氏を偲ぶ』『かそり十話』など

現住所 千葉市新千葉三一七―六

本保弘文 一九四三年生れ

中学校社会科教諭

論文『兩総の古道―御成街道』など

現住所 千葉市大宮町三三四三一七九

千葉市の民話・伝説・歴史ばなし

0039-037988-4462

印刷 昭和54年8月10日

発行 昭和54年8月15日

編著者 安藤 操

発行者 能勢 潔

発行所 錦千秋社

〒101 東京都千代田区西神田

3-9-14 吉田ビル

振替 東京1-185053

☎(03)264-6718(代)

発売 錦多田屋

〒283 千葉県東金市東金1135

☎(0472)24-1333(代)

印刷製本 図書印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。落丁・乱丁の際はお取替えいたします。

千葉市の民話・伝説・歴史

安藤 操 編著

まえがき

稲毛や出洲の遠浅の海岸で潮干狩や遊泳に興じたのは、つい先日のような気もするのだが、それはもう、とうの昔になってしまった。今、そのあたりの埋め立て地に立つと、過ぎし日のなつかしい印象にかさなって、高層の団地がおしかぶさるように視野をさえぎる。

首都圏に組みこまれ、工業地帯と住宅地が急激に広がった千葉市には、すでにサツマイモ畑とノリ採り舟に象徴される、かつてのひなびた面影はない。だが、住む人達の多くにとっては、そういう古い千葉の町のたたずまいを知るよしもないであろう。

私達は、そういう新しい市民の人達に生活の原点としての「千葉市」のあゆみを少しでも深く知ってほしいと考えた。また、土着の人達には、心のふるさととしての「千葉市」をあらためて、新しい目で見つめ直してもらいたいと考えた。

きっと、それこそがこれからの「千葉市」の発展のための大きな力——歴史と文化を支えとした新しい地域共同体の創造のエネルギーとなるはずだからである。

ところで、この書には「昔話・伝説」などのように口うつし（口承）で継承されて来たものや、先祖代々の習俗として受け継がれて来た「祭り」や「年中行事」、さらに子どもの「遊びや年中行事」、

労働にともなうて歌われて来た「わらべ唄・民謡」などを紹介するとともに、「先土器時代」からの郷土の歴史の流れも、遺跡やそこからの出土品、さらに文献などを手がかりにして紹介することにした。前者は私たちの生活の中に受け継がれて来た「民俗」——無形の文化財であり、後者は有形の文化財や文献によって、その世界をうかがうことのできる科学としての「歴史」である。

「ふるさと千葉市」を現在の時点で時間の流れとしてまるごとにとらえ、未来へと橋渡しをするためには、生活の古典である「民俗」と、時代の年輪である「歴史」との両側面を踏まえる必要がある。ここにこそ生きた郷土史が存在すると私たちは考える。

多くの方々に、この書が愛読されることを願ってやまない。

一九七九年 六月

編著者

目次

まえがき……………三

第一章 昔話を楽しむ……………九

天女と羽衣のはなし……………一一

その一「羽衣の松」……………一一

その二「武石の羽衣神社」……………一六

その三「千葉氏と月星の紋」……………一七

千葉笑いのはなし……………一八

君待橋のはなし……………二四

大和田の文五郎の考行ばなし……………二七

第二章 伝説の地を歩く……………二九

千葉寺のはなし……………三一

その一「桜木を薪にしない」……………三二

その二「千葉寺のはすの花」……………三三

その三「もどり鐘」……………三四

その四「年賀記念切手の燈籠」……………三四

平将門のはなし……………三五

その一「亥鼻の七天王塚」……………三六

その二「将門と白馬」……………三八

その三「将門の残党」……………三九

月星の家紋のはなし……………四〇

千葉家の家紋について……………四一

寄せられた情報から……………四五

ヤマトタケルのはなし……………五三

にい箸のはなし……………五四

七めぐり塚のはなし……………五七

大巖寺の七不思議のはなし……………五九

その一「竜が沢の地名の由来」……………五九

その二「鳴かずの池」……………六一

その三「雨降り井戸」……………六一

その四「虎角の杉」……………六二

その五「虎角の梅」……………六三

その六「榊の樹令」……………六三

その七「開かずの間」……………六三

鶉の森のはなし	六四
頼朝のはなし	六五
その一 「矢吞清水」	六五
その二 「寒川と白旗神社」	六五
その三 「お茶の水」	六六
その四 「幕張・馬加・畑の地名の由来」	六六
紅嶽清水のはなし	六七
寒川神社の獅子頭のはなし	六八
いぼとりの地蔵と不動のはなし	六九
その一 「胤重寺の塩地蔵」	六九
その二 「真照寺の爪彫地蔵」	七〇
その三 「西光寺のいぼとり地蔵」	七〇
鎌取のはなし	七〇
七里法華のはなし	七一
怒閑塚と五日堂	七二
もの見の松のはなし	七六
小便鐘のはなし	七七
提灯塚と一夜街道のはなし	七八
身変り観音のはなし	七八
登渡神社のはなし	七九

綿打池のはなし	八一
---------	----

第三章 祭りと年中行事を知る

だらだら祭りのはなし	八九
雨降り獅子と弥勤おどりのはなし	九二
浅間神社の神楽のはなし	九五
三山の祭りのはなし	九九
おびしゃと天道念仏のはなし	一〇一
成らせ餅のはなし	一〇四
年中行事十二か月のはなし	一〇五

第四章 町名を探る

花島町	一一二
院内町	一一三
祐光町	一一三
道場（北・南）町	一一四
五十土町	一一四
菅田町	一一四

目 次

生実町	一二五
作草部町	一二五
矢作町	一二五
東山科町	一二六
浜野町	一二六
椎名崎町	一二六
長沼町	一二七
検見川町	一二七
坂月町	一二八
高品町	一二八
鶴沼町	一二九
椿森町	一二九
桜木町	一二九
通町	一二〇
要町	一二〇
轟町	一二〇
亥鼻町	一二〇
亀井・亀岡町	一二一
本町	一二二
市場町	一二二

弁天町	一二二
神明町	一二三
村田町	一二三
稻荷町	一二四
加曾利町	一二四
貝塚町	一二四
むずかしい地名	一二五
地名 今と昔	一二六

第五章 民謡をたずねて

盆踊り唄	一二九
院内の盆踊り唄	一三〇
園生の盆踊り唄	一三〇
坂月の盆踊り唄	一三一
犢橋のくるりおし唄	一三二
園生のくるりおし唄	一三二
検見川のくるりおし唄	一三三
園生の田植唄	一三三
坂月の田植唄	一三四

園生の草刈唄……………	一三五
御成街道の馬子唄……………	一三五
子守唄……………	一三五
大津絵節……………	一三六
第六章 歴史をさかのぼる ……………	一三七
石器のはなし……………	一四二
貝塚のはなし……………	一四三
縄文人の体格はどうか……………	一四五
縄文人は貝を煮たか……………	一四六
加曽利貝塚の石のふるさとは……………	一四六
土器のはなし……………	一四七
その一「縄文式土器」……………	一四七
その二「弥生式土器」……………	一四八
大賀ハスのはなし……………	一四九
古墳のはなし……………	一五二
防人のはなし……………	一五五
千葉県出身の防人の歌……………	一五七
更科日記のはなし……………	一六〇

妙見縁起のはなし……………	一六三
千葉氏のはなし……………	一六六
胤宗と内裏の女房のはなし……………	一七一
常胤と源氏再興のはなし……………	一七二
小弓城のはなし……………	一七六
土気城のはなし……………	一七八
御成街道のはなし……………	一八一
丹後堰のはなし……………	一九一
重俊院のはなし……………	一九三
いも神様のはなし……………	一九五
穴川野開拓のはなし……………	一九八
県庁のはなし……………	二〇〇
民間航空発祥の地のはなし……………	二〇二
千葉市誕生のはなし……………	二〇四
戦災のはなし……………	二〇六
あとがき……………	二一〇

第一章 昔話を楽しむ



はじめに

「昔、昔。ある所に爺さまと婆さまとあったそう」で始まり、「どっと、はらえ」や「さあつと昔のこんにゃらぼう」などで終わる話を「昔話」という。これは、文字の読み書きのできなかった私たちの祖先が、長い長い時間をかけて、味わい豊かな語りの文芸を創り上げて来た、その文化遺産である。

昔話は、もともと村々での祭りの晩の神様を迎える寄り合いで語られたのが始まりで、それが徐々に夜なべ仕事の眠気ざましや、幼い子どもを楽しませる炉辺ろべの語りになって来たようである。

ところが、そういう昔話を語る場（村々の寄り合い、各戸が集まって行方夜なべ仕事、炉辺を囲む家庭の団らんなど）が消えて行く一方の現代では、昔話も自然に消滅して行かざるを得ない。

とくに、千葉市のように早くから都市化の波に洗われてしまった地域では、純粹の語りの文芸を採集することは至難である。ここには、伝説や行事を物語化して昔話ふう仕立てて紹介することにした。

天女と羽衣のはなし

その一「羽衣の松」

県庁の前庭がちょっとした公園になっておって、枝ぶりのいい松が植えてある。これを、「羽衣の松」っていう。また、この公園を羽衣公園っていうが、そのわけを知ってるかな。

それには、こんな話があったんだってよ。

むかし、むかし、ざっと千年ぐらいいもむかしのことだつて。千葉の町は、まだ草深いところだよ、見わたすかぎりの沼地だったが、それでも、県庁のあたりは亥鼻山いのばなに近いから、ちっとばかり小高くなつてるところもあってな、そこに一本のえだぶりのいい、でっけえ松がはえてたんだって。その松の近くには池があつて、清水がわいていたんだってよ。だから、このあたりを「池田の里」といつたつて。夏になるとこのあたりには、はすの花がさいて、そりゃみごとながめだったそうなの。

そのころのことだが、亥鼻の山に城を築いて、上総の大椎おおじから若殿様に移り住んで来たんだって。千葉大夫常重っていう殿様で、みるからに強そうな若大将だった。

ある日のことよ、池田のはすがみごとだということを聞いて若殿様は、ひとりで見物に出かけたん

だって。すると、みごとに松の枝に、見たこともないきれいな白い布がひっかかって、風にふかれてひらひらとまっておったって。

「おかしいこともあるもんだな」

と思つて、そつとそばに近づくとなんともいえない、いいかおりがただよつてきた。それでな、池のほとりには三人の若い娘がおつてよ、清水でからだを清めていたつて。長くたらしたまつ黒な髪。白くすきとおつたみごとに肌。この世の人とは思えないほどのきれいな娘たちだったんだつて。

常重は、はすの花のかげから、うっとりしながら娘たちをながめておつたんだつて。時のたつのも忘れてしまつてな。ところが、そのうちに、娘たちの中のひとりに、見つかつてしまったんだつて。はつとしてわれに返つた常重は、松の枝にひっかかつておつた白い布をなんとはなしに手にすると、夢中で城にもどつてきてしまったんだつてよ。

城にもどつてきてても、その日は一日じゅう、ぼうつとしておつて、まるで夢の中にいるみたいな氣持ちだったつて。

その晩は、月の光がとてもすんで、亥鼻の城からながめると都川の流れが白くかがやいておつた。常重が、夢見ごちでそのけしきをながめておると、どこからはいつてきたのか、庭先にな、昼間見た娘のひとりが立っておつたんだつて。

第一章 昔話を楽しむ



千葉羽衣

「そなたは」

と、常重がたずねると、

「わたしは、天上に住む者でございます。あなたさまに羽衣を持ち去られてしまい、天に帰ることができませんぬ。どうか、お返しくださいますよう」

と、金のすずをふるような声で答えたって。

「そうであったか。それはすまぬことをした。だが、そなたよ、この地上に住んでみるのいいものだ。どうかの、この城にとどまってはもらえぬか」

と、常重はやさしく言って、じっと天女の顔を見つめておったって。

天女は顔を下に向けて、考えこんでおったが、そのうちに、ほったがほんのり赤らんできて、しばらくすると、ちょこっとうなずいたんだってよ。

それから、常重と天女は、どこへ出かけるにもいっしょで仲のいいことっていったら、もう、この総の国（上総・下総）で知らない者がいないくらいだったって。それで、つぎの年の夏には、玉のような男の子がうまれたってよ。

ところが、地上に住んで三年と三か月がたったある日のこと、天女は常重に向かってこう言った。「ほんとうに長い間、お世話になりました。とうとうお別れのときがまいりました。申しわけありま

せぬが、天上からの命令で、これ以上この地上にとどまるわけにはまいりませぬ」

言い終わるか終わらぬうちに、いつ見つけたのか、常重がかくしておいた羽衣を、身にまとって、天上へ舞いのぼって行ってしまったって。

この天女はよ、それから何年もの間、音さがなかったが、殿様が亡くなられたときにお城の上をゆっくりと舞っておったって。大きくなった男の子が、その姿を眺めていると空から一つぶの夕顔の種を落として、また天上にもどって行ってしまったって。

その種をまくと、芽が出、つるが伸びて、大きな花を咲かせたって。

それでよ、大きな大きな夕顔の実になり、それを割ってみると、中から天女にそっくりの観音様が出てきたって。

この観音様を、肌身はなさず身につけて戦ったから、いつも負けたことがなかったって。

この本尊様が、今は香取の樹林寺にまつられている「夕顔観音」だということよ。

この男の子が、のちに千葉介常胤ちのすけつねおという武将になったんだって。どういうわけか、殿様のくせに質素な身なりで、ふだんはあんまり口もきかないで、ぼやあつとしておったが、いざいくさとなると、その強いことよ、だあれもかなう者がなかったんだって。

源頼朝が、石橋山の合戦に負けて安房に落ちのびたときには、だれよりも先に頼朝を助けたんだっ